

木杭液状化対策で研修

コスト削減し普及拡大目指す

長野県木連・飛鳥建設

信州カラ松を使った軟弱地盤
対策工法（諏訪湖畔）



連会長は「県を挙げて林業活性化に取り組んでいる。この工法が確立して安心して使えるように、皆様と手を携えて取り組んでいきたい」、三輪滋飛鳥建設技術研究所長は「生長過程でCO₂を貯蔵した丸太を使って、地盤のなかに森をつくる。地球温暖化も同時に抑制する時代の要求にマッチした工法」とあいさつした。

長野県は信州カラ松の土木利用に取り組みしており、丸太基礎杭設計マニュアルを作成した。県の土木建設用材出荷量は1970年の20万5000立方メートルをピークに年々減少しており、2012年は2万7000立方メートルとピーク時の13%まで落ち込んでいる。丸太基礎杭工法は末口径14センチの丸太が活用でき、林業活性化に役立つと期待されている。

今回の実証研究は、工事費内訳の一例において材料費36%、工事費9%、機械損料47%等となっており、機械損料の占める割合が多いことから、使用重機のタイプ別に施工性などを調査しながらコスト削減を図るのが目的だ。1日当たりの打設本数などを調査しながら、施工性能の向上を図っていく。

カラ松丸太を使った木杭打設による液状化対策工法の実証研修会（主催＝長野県木材協同組合連合会、飛鳥建設）が22日、諏訪湖畔で開催された。工法普及や施工性能向上などを目的としており、行政、林業等の関係者120人が参加した。丸太打設液状化対策&カーボンストック工法（LP-LiC工

法）は、飛鳥建設、兼松日産農林、昭和マテリアルの3社が共同開発した工法でこのほど、建設技術審査証明を取得した。木材は鉄などの資材に比べて製造や加工に要するエネルギーが少なく、炭素を貯蔵するほか、丸太は半永久的に健全な状態を保ち、砂を用いた密度増大工法と同等の液状化対策効果を発揮する。

細川忠國長野県木協